

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01325

研究課題名（和文）南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けた史料性及び全容の解明と情報ツールの構築

研究課題名（英文）Reading Yijianzhi by Hong Mai of Southern Song as Historical Source Material

研究代表者

須江 隆（SUE, Takashi）

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：90297797

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,300,000円

研究成果の概要（和文）：『夷堅志』206巻は、南宋の洪邁が各地で見聞・収集した怪事などを纏めて書き記した書で、志怪小説に分類される。一個人の著作としては空前の書物で、その内容は社会全般に及び、風俗習慣から神仙鬼神、精神生活や医薬の処方など極めて多岐にわたる。そのため、他の著作には見えない、当時の人々の生き生きとした日常性や生活文化の実態、価値観などを窺い知ることができる史料の宝庫である。

本研究では、『夷堅志』を如何に史的研究に活用すべきなのか、どうしたら『夷堅志』活用の便をよりはかかれるのか、『夷堅志』を国際的共同研究の素材として推進するためにはどうすべきなのかという課題に取り組み、その成果を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、全容の解明が殆ど進んでいなかった『夷堅志』支甲所収の逸話に関わる詳細な訳注稿を作成し、当該箇所所収されている逸話の見える化をはかったところにある。これらの成果は、中国史研究者のみならず、中国文学や日本文学研究者からも高い評価が得られ、内外の関連学界にインパクトを与えることになった。また着目した各逸話から抽出できた史実は、従来の研究でいわれてきた事実を覆すものも複数含まれていた。

更に本研究での訳注稿の作成・公表は、現代を生きる我々が現実を見つめ直す上で、比較・参照すべき過去の生き生きとした日常の実態が素材として提供されたことを意味するため、社会的意義をも有する。

研究成果の概要（英文）：Yijianzhi, consisting of 206 volumes, is a curation of anomalous anecdotes that Hong Mai had heard and collected in different places. It is categorized as a collection of strange tales. The work covers all areas of society from local customs and stories of deities and demons to spiritual life and medical prescriptions. As such, we can find vivid impressions of daily life and culture as well as values of the people of the time that we cannot find in most other writings by scholar-elites. Literally, it is a treasure trove of historical materials.

We have endeavored to discuss the importance of using Yijianzhi as historical source material, how to facilitate the use of the text for such purposes, how to promote this text, which is attracting more attention in Japan and abroad, as a subject of international collaborative studies, and this has led to the establishment by the author with several other scholars of a collaborative research project.

研究分野：アジア史およびアフリカ史関連

キーワード：夷堅志 南宋 洪邁 史料論 史料活用 訳注 中国近世社会 国際共同研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の学術的背景

我が国の中国史研究は、一般人民の日常性や生活文化史を発掘して叙述しようとする取り組みには消極的であった。それは多分に、史料の限界と研究の視点の偏りに起因していた。従って、そこに革新を起こさねば、今を生きる我々が直面する様々な日常を見つめ直すための史的素材の提供は難しく、現代的意義を有する史的研究成果は生み出せない。

周知の如く、内藤湖南は、その著作『支那論』等の中で、宋代以降の中国社会の特徴として、君主独裁制の発達という点を指摘したが、一方で、人民階層による地方文化の確立・発展という点にも言及していた。しかしその後、かかる近世観をより発展的に継承した宮崎市定は、近世期を中央集権的文人官僚支配の時代として捉える傾向を強めた。後の研究者に与えたその影響は大きく、人民の日常生活の場であった地方や地域を論題に冠した研究であっても、殆どが儒教の素養を備えた文人官僚や文人官僚候補生とも言える知識人の視点からのみ考察されることが多かった。そのため、文人官僚や知識人が記した地方志や碑文等の叙述は、どれも似たり寄ったりで、それらを活用して描きうる中華帝国の日常性や生活文化の実態は、どこでも同じ性質しか抽出できないと言われてきた。加えて、宮崎の教えを受けた森正夫が1980年代前半に提唱した所謂「地域社会」論からの影響も少なからずあり、単なる「まとまりの場」のモデルの構築や、そこと公的権力との関係の解明に重点を置いた事例研究が量産され、純粋に実体を伴った生き生きとした地域社会の日常性や生活文化の特質を解明する研究があらわれなかった。

一方国外に目を向けると、1980年代以降の米国では、内藤湖南や青山定雄らの影響を受けたロバート・ハイムズなどを代表とする所謂「ローカル・エリート」に関する研究が急速に盛んとなり、その傾向は後進にも受け継がれている。しかしあくまでも「エリート」に着目した地域史研究であり、地方と中央権力との連関性や文人官僚支配の視点を重視したものである点は否めず、そこに人民の日常性や生活文化の実態を見出すことはできない。

従って以上のような学術的背景からか、高等学校「世界史B」の教科書を複数見ても、宋以降に関わる叙述には、人々の日常性や生活文化史的な独自の展開に関する内容を含んでおらず、真の社会像を示すものになっていない。本研究は、史料の限界と研究の視点に革新を起こし、中国近世社会像の再構築を目指すために、史的研究では注目されなかった筆記史料『夷堅志』の有効活用を通じ、生活文化史研究の一層の進展を期して計画されたものである。

『夷堅志』206巻は、南宋の文人である洪邁(1123年~1202年)が、官僚をしていた間に、各地で見聞・収集した怪事などを纏めて書き記した書で、当時の流動的な社会が生み出した志怪小説に分類される作品である。もとは420巻にも及んだと言われ、一個人の著作としては空前の書物である。博識の洪邁が書き留めただけに、その内容は社会全般に及び、風俗習慣から神仙鬼神、精神生活や医薬の処方など極めて多岐にわたる。そのため、他の殆どの知識人たちの著作には見えない、当時の人々の生き生きとした日常性や生活文化の実態、価値観などを窺い知ることができる。従って『夷堅志』は、嘗ての中国近世社会の真の実像を読み解く上での史料の限界に革新を起こせる、他に類例を見ない貴重な史料と断言できる。

かかる特質からすれば、本書を如何に読み解いて史料として活用すべきかについては、中国史のみならず、中国学関連分野においても喫緊の課題であったはずだが、日本における本書そのものの基礎研究は、十分なレベルにあるとは言いがたい。本書に輯録されている逸話が、約2,700を数えるという多様さと豊富さの故からか、内容の繁多さが災いしてか、解読に労力と知識を要するためか、逸話の史料性や書物自体の内容の全容が殆ど解明されておらず、『夷堅志』をタイトルに掲げた专著や全訳注などもいまだに完成していない。

こうした中で近年、偶然にも内外の中国学界で、『夷堅志』に対する関心が高まっている。国内では2014年に、第59回国際東方学会議(東方学会主催)において、シンポジウム「洪邁『夷堅志』の世界」が行われた。国外でも2015年に、米国アジア研究協会第2回アジア会議において、円卓会議「『夷堅志』再考」が企画された。そのため、今後は欧米圏でも『夷堅志』をめぐる様々な研究活動が活発化する可能性がありうる。これら国際会議の両者に、世界で唯一参画する機会を得た研究代表者が痛感した『夷堅志』研究最大の課題は、研究関係者が、本書の全容解明・把握に向けた作業には概ね消極的であるという点であった。

(2) 研究課題の核心をなす学術的「問い」

以上の学術的背景に鑑みて、本研究課題の核心をなす学術的「問い」として、「中国近世社会の日常性や生活文化の実態を解明するために、『夷堅志』を如何に史的研究に活用すべきなのか、 どうしたら『夷堅志』活用の便をはかれるのか、 内外で関心が高い『夷堅志』を国際的共同研究として推進するためにはどうすべきなのか」の3つを設定する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の学術的な「問い」に応えるべく、『夷堅志』の史的研究への有効活用に向けた、史料性及び全容の解明と、国際共同研究による情報ツールの構築にある。

周知の如く『夷堅志』に関するこれまでの研究は、中国文学研究者を中心とした成果が殆どで、『夷堅志』をめぐる近年の研究活動の活発化も、当該分野の研究者に負うところが大きい。中国史分野の研究もないわけではないが、逸話の一部をつまみ食いの活用した成果に過ぎなかった。かかる動向に対して本研究では、『夷堅志』の史的研究への有効活用を目指し、未着手であった同書の史料的特質と全容の解明を期している。この画期的な目的に、学術的独自性が認められる。加えて本研究では、解明した『夷堅志』の史料性と全容に関する成果を、国際的共同研究のもとで、情報ツールとして逐次公開する計画であるので、同書活用の便宜を内外の中国学研究者にはかることもでき、大きな意義を有する。

『夷堅志』の有効活用が可能になれば、未知の逸話の解説・分析作業が飛躍的に進展し、現代を生きる我々が比較・参照すべき過去の生き生きとした日常の実態が素材として提供され、現実を見つめ直す際に役立つ成果が生み出される可能性がある。本研究は史的研究であるが、現代的意義を有する成果の構築を目指している。ここに創造性を見出せる。

3. 研究の方法

(1) 本研究の体制

本研究は、学術的な「問い」～ に応じて、以下のア)～カ)の成果を出すために、研究代表者1人と研究分担者7人、内外の研究協力者5人により、4年次計画で遂行される。研究協力者は、熊本崇(東北大学・名誉教授)・榎並岳史(新潟大学・職員)・村田岳(神田外語学院・職員)・Hsiao-wen CHENG(ペンシルベニア大学・教養学部・助教)・洪性珉(東北亜歴史財団・招聘研究委員)の5名である。但し、4年間で約2,700話を所収する『夷堅志』の全容を完全に解明・把握することは困難なので、まずは『夷堅支甲』に所収の逸話に着目する。ここは未開拓の箇所であり、金朝支配下の華北の実態を物語る、貴重な史料を提供してくれる。

(2) 本研究の方法

『夷堅志』を如何に史的研究に活用すべきなのか

ア) 『夷堅志』の史料性を解明する

『夷堅志』当該部分に所収の多様な逸話を、本研究の構成メンバーが、研究分野に応じて任意に抽出し、年間10話程度を目標に解説・分析作業を行って史料性を解明する。分析作業は次の三つを行う。第一に、編者である洪邁の作品の中での役割(好奇心旺盛な聞き手としての役割なのか、忠実な記録と偽っているだけの編集者としてのなのかなど)を検討する。第二に、各逸話のオリジナリティに関して検証するために、類似の逸話を載せる前代の筆記史料『搜神記』『太平広記』などや、各地域の伝承を含む地方志・碑文などとの内容の比較をする。第三に、各逸話のフィクション部分とノンフィクション部分を明確化するために、宋代を中心とした他史料との照合をする。

イ) 『夷堅志』の後世への受容の実態を明らかにする

『夷堅志』の元・明刊本を調査することを通じて、どのような逸話が後世、広く読まれ受容されたのかを考察し、元・明代の思潮や価値観の解明に資する成果を構築する。

ウ) 現代的意義を有する役に立つ史的研究成果を呈示する

詳細な注を付けた訳注稿の作成を目指す。その訳注稿をベースに、生き生きとした当時の人々の生き様や多様な悩み、価値観や考え方などを、一般誌を媒体として国民に公表し、現代を生きる我々の生き方や価値観を見つめ直せるようにする。

どうしたら『夷堅志』活用の便をはかれるのか

エ) 『夷堅志』の全容解明に向けた取り組みを継続する

史的研究への活用の可能性を示すキーワード等を抽出し、下のような一覧表を作成する。

標題	内容関連キーワード	中心人物	地域	時期	提供者	出典
張相公夫人	道に迷う・幻・不倫 ・貞操観念・交通・宴	錢履道・ 河中府尹張相公	京兆・咸陽 ・商州・虢州	皇統年間	?	支甲巻1

オ) 『夷堅志』の有効活用を促進する情報ツールを整備し公開する

オープンアクセス可能なプラットフォームを整備する。既述の一覧表や訳注稿、元・明刊本情報、『夷堅志』研究文献目録、逸話の舞台を示す地図等の公開を予定している。

『夷堅志』を国際的共同研究として推進するためにはどうすべきなのか

カ) 国際共同研究プロジェクトを構築する

研究協力者のHsiao-wen CHENGは、米国アジア研究協会(AAS)第2回アジア会議での円卓会議「『夷堅志』再考」の主宰者であり、欧米圏・中国語圏の『夷堅志』研究者に通じている。また同じく研究協力者の洪性珉は、韓国での『夷堅志』分析プロジェクトに関する情報を持ち、韓国人研究者との学術交流に貢献できる。彼らを窓口として、内外で『夷堅志』に関する集会を開催し、学術交流を促進して国際共同研究プロジェクトを立ち上げる。

(3) 本研究の計画

平成31年度(令和元年度)の研究計画

初年度は、研究全体の準備期間にあて、研究内容の打合せと作業内容の決定に重点を置く。

ア)『夷堅志』の史料性の解明(担当:全ての研究者)

各研究者は、分析を担当する逸話を抽出し、上述の三つの分析作業を実施する。前代の逸話との比較は、主に津田資久・小島浩之・江川式部が担当し、地方志・碑文の伝承との比較は、主に須江隆・榎並岳史が担当する。分析に不可欠な比較・照合用の史料については、各研究者が、既存の設備図書を利用するのに加え、東北大学・東京大学・京都大学等で蒐集・複写するほか、「中国前近代史関係図書」を新規購入して作業を進める。

イ)『夷堅志』の後世への受容の実態を解明(担当:渡辺健哉・高橋亨)

東北大学所蔵の狩野文庫には、明刊本『夷堅志』が存在するなど、国内の各研究機関には、複数の同書版本が所在している。それら元・明刊本の所在と内容の調査・分析を行う。

ウ)現代的意義を有する史的研究成果の呈示(担当:全ての研究者)

上記ア)の作業と連動させて、各研究者が詳細な注を付した訳注稿を2~3話程度作成する。

エ)全容解明に向けた取り組み(担当:全ての研究者)

上記ア)ウ)の作業と連動させて、各研究者が一覧表作成作業を推進する。

オ)情報ツールの整備・公開(担当:須江隆)

上記ア)~エ)の各研究者の作業内容を確認し、個々の成果を精緻化するために、研究打合せを日本大学で開催し、研究代表者が成果の取り纏めとツールの整備をする。

カ)国際共同研究プロジェクトの構築(担当:Hsiao-wen CHENG・洪性珉)

Hsiao-wen CHENGが欧米圏・中国語圏の『夷堅志』研究の動向を、洪性珉が韓国の同研究の動向を調査し、研究者情報の提供や『夷堅志』研究文献目録の作成を行う。

令和2年度以降の研究計画

令和2年度・令和3年度は、上記ア)ウ)エ)オ)の作業を継続する。各研究者は、年間2~3話程度の作業分担のノルマを果たす。上記イ)の作業も継続し、後世への受容の実態を解明する。上記イ)ウ)に関わる成果を論文化し、学会や学術誌・一般誌等で公表する。上記カ)に関しては、初年次の作業を継続する。また令和2年度には、国外の研究者3名を招聘し、国内でワークショップを開催する。令和3年度には、米国のペンシルベニア大学で開催のワークショップかAAS年次大会に、研究者4名を派遣して学术交流の促進をはかる。

令和4年度は、上記ア)ウ)エ)オ)の作業を完了させ、上記オ)の成果公開に向けて研究全体の総括をする。この年度は、最終年度にあたるので、全成果の報告書を作成して提出する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究の研究期間のうちの初年度以外は、当初は予期できなかった新型コロナウイルス感染症蔓延による影響で、計画通りの研究の遂行が困難を極め、実現不可となったり、効率的に進められなくなったりした作業がでてしまった。しかし『夷堅志』に直接関わる研究成果8篇をはじめ、『夷堅志』解説に資する多数の成果物を学術雑誌等に公表することができた。その主な成果は、以下の ~ の通りである。

『夷堅志』支甲巻1~3所収の逸話の訳注稿を公表

本研究では、『夷堅志』所収の逸話を史的研究の史料として活用するために、各逸話の緻密な解析を試みた。訳注稿には、【原文】【現代語訳】【注釈】【解説】【キーワード】を掲げることとし、全36話に関わる成果を学術雑誌に公表した。特に【注釈】は極めて詳細であるため、史的研究への活用に大いに資する可能性がある。

公表した訳注稿に関わる逸話の史料性を究明

本研究で分析された逸話のなかには、前代から伝承されてきた事柄や要素などを多数含むものも多岐にわたることが分かった。そうした探究は、『夷堅志』の逸話がどのようにして形成されてきたのかを知る上で大きな手がかりとなり、史料性の解明に役立った。

逸話の全容の見える化をはかった一覧表の公表

『夷堅志』支志部分に関しては、これまで研究が進んでいなかったため、どこにどのような逸話が含まれているのかについては、判然としていなかった。そこで本研究では、当該部分に所収されている逸話の全容の見える化をはかるために、各話の標題、内容関連キーワード、中心人物、地域、時期、話題提供者、出典の情報を抽出した一覧表を作成し公表した。

中国近世社会の日常性や生活文化の実態を解明

『夷堅志』所収の逸話には、同書が志怪小説の書と分類されることから明らかなように、内容的に多くのフィクションが含まれている。しかし一方で、現実世界で生じた出来事や実在の人物のエピソードなどに即した新たな史実を引き出すことも可能である。そこで本研究では、各逸話の解説後に、1話ずつ詳細な【注釈】と【解説】を訳注稿に付けることで、中国近世社会の日常性や生活文化の実態解明に資する成果を公にできた。

『夷堅志』支志のテキスト研究の成果公表

本研究で底本とした『夷堅志』支志のテキストの版本系統を明らかにした成果を「『夷堅志』支志のテキストについて」と題して公表した。

国際共同研究に向けた取り組み

新型コロナウイルス感染症蔓延の影響で、当初計画していた研究分担者の海外派遣や研究協力者の招聘は実現できなかった。しかし研究協力者の尽力により、海外の『夷堅志』研究に関わる論文リストの作成を実現できた。その成果は草稿段階であるため未公表であるが、何れ公表したい。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

『夷堅志』所収の逸話から抽出できた史実は、従来の研究でいわれてきた事実を覆すものも複数含まれていた。従って、それらに関する研究テーマを設定して成果を論文化すれば、内外の関連学界へインパクトを与えることも可能である。

本研究での訳注稿の作成・公表は、現代を生きる我々が比較・参照すべき過去の生き生きとした日常の実態が素材として提供されることを意味するため、現実を見つめ直す際に役立つ成果が生み出されたといえる。

全容の解明が殆ど進んでいなかった『夷堅志』支甲所収の一部逸話の見える化がはかれたことは、内外の関連学界にインパクトを与えることになった。特に一覧表での内容関連キーワードの提示は、中国史研究者のみならず、中国文学や日本文学研究者からも高い評価が得られた。

(3) 今後の展望

本研究を通じて、『夷堅志』支志に関しては、よりインパクトのある成果を内外に示せる感触が得られた。そのため研究代表者は、今回の研究分担者・研究協力者を含むより大きな研究体制を構築し、今後も研究を継続して展開していくことになった。この研究により、同書の史料性及び全容の解明と、中国史や中国学研究への活用の便をはかるための情報ツールの構築が進展するのみならず、嘗ての中国地域社会における人々の生き生きとした日常性や生活の実態、価値観などが解明され、現代を生きる我々が日常生活を見つめ直す上で、大いに役に立つ成果が生み出される可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計40件（うち査読付論文 20件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡辺健哉・小島浩之・村田岳	4. 巻 22
2. 論文標題 南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けて（五）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪公立大学東洋史論叢	6. 最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田資久	4. 巻 23
2. 論文標題 関尾史郎著『三国志の考古学 出土資料からみた三国志と三国時代』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本秦漢史研究	6. 最初と最後の頁 209-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江 隆・江川式部	4. 巻 20
2. 論文標題 南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けて（六）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本猛・梅村尚樹・須江隆	4. 巻 22
2. 論文標題 南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けて（七）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学篇	6. 最初と最後の頁 67-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江隆・小島浩之・榎並岳史・津田資久・高橋亨	4. 巻 13
2. 論文標題 南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けて(八)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬奈津子・江川式部	4. 巻 4(学系統合号)
2. 論文標題 『封氏聞見記』訳注(九)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 札幌大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 335-352
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江隆	4. 巻
2. 論文標題 中国史上における地方志編纂の夜明け 北宋から南宋へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地方史誌研究の現在(勉誠出版)	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江隆	4. 巻 259
2. 論文標題 宋朝総志編纂考 総志から方志へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア遊学「書物の中の近世国家 東アジア「一統志」の時代」	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋亨	4. 巻 259
2. 論文標題 明代景泰 天順年間の政局と一統志	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア遊学「書物の中の近世国家 東アジア「一統志」の時代」	6. 最初と最後の頁 82-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅村尚樹	4. 巻 80-3
2. 論文標題 宋代学記の変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本猛	4. 巻 105-1
2. 論文標題 北宋「滅び」への道程 「二帝北狩」の成立過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 28-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田資久	4. 巻 12
2. 論文標題 静嘉堂文庫所蔵『建康実録』校勘記(二)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国土館人文学	6. 最初と最後の頁 151-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬奈津子・江川式部	4. 巻 2 (学系統合号)
2. 論文標題 『封氏聞見記』訳注 (八)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 札幌大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 201-218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江隆・榎並岳史	4. 巻 19
2. 論文標題 南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けて (三)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 76-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江隆・小島浩之・藤本猛・渡辺健哉・高橋亨	4. 巻 12
2. 論文標題 南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けて (四)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江隆	4. 巻 -
2. 論文標題 中国史研究者から見た南宋の知識人・洪邁と『夷堅志』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国古典学の再構築	6. 最初と最後の頁 87-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江隆、榎並岳史	4. 巻 18
2. 論文標題 南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けて(一)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 25-41
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江隆、小島浩之、津田資久、梅村尚樹、村田岳	4. 巻 11
2. 論文標題 南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けて(二)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本猛	4. 巻 -
2. 論文標題 徽宗朝の神霄玉清万寿宮	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史料與場域：遼宋金元史の文獻拓展與空間體驗	6. 最初と最後の頁 139-161
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本猛	4. 巻 78
2. 論文標題 宋初四代の帝位継承と宦官	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史窗	6. 最初と最後の頁 59-79
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅村尚樹	4. 巻 -
2. 論文標題 従文集史料分布看宋元時代の地方史与断代史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史料與場域：遼宋金元史の文獻拓展與空間體驗	6. 最初と最後の頁 272-296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺健哉	4. 巻 -
2. 論文標題 『経世大典』逸文再討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史料與場域：遼宋金元史の文獻拓展與空間體驗	6. 最初と最後の頁 317-332
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島浩之	4. 巻 19
2. 論文標題 オンライン漢籍	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 漢字文献情報処理研究	6. 最初と最後の頁 194-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江川式部	4. 巻 122-2
2. 論文標題 唐代の藩鎮と祠廟	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田資久	4. 巻 -
2. 論文標題 侯景 南北朝を駆け抜けた六鎮武人の挽歌	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 侠の歴史 東洋編上	6. 最初と最後の頁 258-277
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田資久	4. 巻 -
2. 論文標題 王琳 南朝梁の残光	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 侠の歴史 東洋編上	6. 最初と最後の頁 278-297
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SUE Takashi	4. 巻 117
2. 論文標題 The Significance of Disseminating Abroad the Fruits of Japanese Sinology: With Reference to My Own Experiences of Academic Exchange with Euro-Americans	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須江 隆	4. 巻 995
2. 論文標題 書評 梅村尚樹『宋代の学校 祭祀空間の変容と地域意識』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 55-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋亨	4. 巻 128-5
2. 論文標題 2018年の歴史学会 回顧と展望 東アジア 中国 明・清	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 227-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本猛	4. 巻 67
2. 論文標題 北宋時代の宦官世族・再論 真定王氏を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 清泉女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺健哉	4. 巻 19
2. 論文標題 元中都研究の現状と課題 大都・上都・中都の比較史的考察に向けての覚書	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪市立大学東洋史論叢	6. 最初と最後の頁 123-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田資久	4. 巻 10
2. 論文標題 静嘉堂文庫所蔵『建康実録』校勘記(一)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国土館人文学	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島浩之	4. 巻 22
2. 論文標題 『唐六典』の編纂に関する一試論：『初学記』と『唐六典』の注	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 25-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江川式部	4. 巻 235
2. 論文標題 中国におけるアブラナ科植物の栽培とその歴史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 78-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江川式部	4. 巻 235
2. 論文標題 植えて・収穫して・食べる 中国史の中のアブラナ科植物	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 115-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江川式部	4. 巻 242
2. 論文標題 唐代の礼学と礼官	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 77-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江川式部	4. 巻 無し
2. 論文標題 唐前半期における儀注編纂について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金子修一先生古稀記念論文集 東アジアにおける皇帝権力と国際秩序	6. 最初と最後の頁 293-329
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬奈津子、江川式部	4. 巻 12
2. 論文標題 『封氏聞見記』訳注(七)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 札幌大学総合研究	6. 最初と最後の頁 84-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎並岳史	4. 巻 無し
2. 論文標題 王倫神道碑の建立とその背景	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宋代史研究会研究報告集(11) 宋代史料への回帰と展開	6. 最初と最後の頁 221-261
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田岳	4. 巻 無し
2. 論文標題 南宋最初期の科挙とその影響 全国実施の類省試を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明日へ翔ぶ5 人文社会科学の新視点	6. 最初と最後の頁 43-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 12件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Naoki Umemura
2. 発表標題 Religious spaces and locality in medieval China; Valerie Hansen 's Changing Gods in Medieval China, 1127-1276.
3. 学会等名 2022年度第6回「部屋と空間プロジェクト」研究会, (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Naoki Umemura
2. 発表標題 Local government schools and academies(書院) in Song China
3. 学会等名 コモンスペースをめぐる理論と歴史：第2回「部屋と空間プロジェクト」研究会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 モンゴル時代の「胸背」
3. 学会等名 第 58 回野尻湖クリルタイ [日本アルタイ学会]
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 元代の三都（大都・上都・中都）とその機能 「移動する王権」をめぐる予備的考察
3. 学会等名 都城制研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 金・元時代の都市と生活
3. 学会等名 人文研アカデミー「草原と中華のあいだ 北方王朝（遼・金・元）の興起とユーラシア東方」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤本猛
2. 発表標題 「二帝北狩」と北宋の滅亡
3. 学会等名 史学研究会例会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梅村尚樹
2. 発表標題 宋代学記の変遷
3. 学会等名 北海道大学東洋史談話会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梅村尚樹
2. 発表標題 宋代士大夫研究の現状と史料の問題
3. 学会等名 北大史学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梅村尚樹
2. 発表標題 宋元の記
3. 学会等名 2021年度宋代史研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江川式部
2. 発表標題 中国唐代の死生観 官人が撰した家族の墓誌・墓祭文から
3. 学会等名 國學院大學文学部共同研究公開研究会『死生観の歴史学 人は死をどのように捉えてきたか』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 榎並岳史
2. 発表標題 「司馬光神道碑」執筆をめぐる 翰林学士蘇軾の憂鬱
3. 学会等名 宋代史談話会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梅村尚樹
2. 発表標題 宋代學記の変遷
3. 学会等名 移動・流動と互動：跨域的歴史与歴史的跨域 東亜地区青年学者遼宋夏金元史国際研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梅村尚樹
2. 発表標題 宋代学記の変遷
3. 学会等名 信息溝通与国家秩序国際会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋亨
2. 発表標題 明代正統 天順年間内閣官職掌の形成
3. 学会等名 南開大学歴史学院講座（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 元の大都の形成 首都北京へと続く道
3. 学会等名 2019年度龍谷大学東洋史学研究会第43回総会記念講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 柯劭忞『新元史』をめぐる国際情勢
3. 学会等名 周縁的社会集団と近代 日本と欧米におけるアジア史研究の架橋—2019年度総括シンポジウム2（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 南宋士人眼中的元代華北社會－以《祈請使行程記》為線索、移動、流動與互動：跨域的歷史與歷史的跨域－
3. 学会等名 東亞地區青年學者遼宋夏金元史國際研討會（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 アジア史の新たな展開 平泉の歴史的意義
3. 学会等名 第20回平泉文化フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江川式部
2. 発表標題 唐の甲祭と冊礼
3. 学会等名 國學院大學国史学会例会報告（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榎並岳史
2. 発表標題 宋代風聞言事考
3. 学会等名 第68回東北中国学会大会（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榎並岳史
2. 発表標題 紹興壬午内禅考
3. 学会等名 第222回宋代史談話会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 宮澤知之・丸橋充拓・舩田善之・井黒忍・伊藤正彦・金文京・山崎覚士・徳永洋介・渡辺健哉・川村康・佐々木愛・矢木毅・大竹昌巳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 306
3. 書名 岩波講座 世界歴史 第8巻 東アジアの展開	

1. 著者名 柿沼陽平・飯山知保・仇鹿鳴・武井紀子・梅村尚樹・永田拓治・堀内淳一・吉永匡史・王博・付晨晨	4. 発行年 2022年
2. 出版社 上海古籍出版社	5. 総ページ数 228
3. 書名 貴族与士大夫:青年学者眼中的中国史	

1. 著者名 吉澤誠一郎・石川博樹・太田淳・太田信宏・小笠原弘幸・宮宅潔・四日市康博・梅村尚樹・大城道則・澤田望・赤木崇敬	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学:アジア・アフリカへの問い158	

1. 著者名 平田茂樹・山口智哉・小林隆道・梅村尚樹・宮崎聖明・塩卓悟・王燕萍・藤本猛・市村導人・齋藤智寛・久保田和男・塚本磨充・緑川英樹・趙晶・東英寿・伊藤一馬・浅見洋二・毛利英介・陳韻如・福谷彬・遠藤聡史・田中有紀・酒井規史・高津孝	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 266
3. 書名 宋代とは何か：最前線の研究が描き出す新たな歴史像	

1. 著者名 中西竜也・増田知之・土口史記・保科季子・藤井律之・岩尾一史・藤本猛・毛利英介・井黒忍・呉国聖・宮紀子・山崎岳・石野一晴・望月直人・水越知・箱田恵子・宮原佳昭・高嶋航	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 よくわかる中国史	

1. 著者名 櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉（編著）・船田善之・山本明志・赤木崇敏・牛瀨・山崎岳・矢澤知行・松下道信・野沢佳美・中村淳・垣内景子・宮紀子・土屋育子・奥野新太郎・徳留大輔・金文京・中村翼・榎本渉・中村和之・向正樹・村岡倫・渡邊久	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 322
3. 書名 元朝の歴史：モンゴル帝国期の東ユーラシア	

1. 著者名 古畑徹・中澤寛将・中村亜希子・井上直樹・植田喜兵成智・村井恭子・渡辺健哉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 252
3. 書名 高句麗・渤海史の射程：古代東北アジア史研究の新動向	

1. 著者名 オリオン=クラウタウ、ミシェル=モール、三浦周、師茂樹、岡田正彦、袁翰顕量、ライアン=ワルド、渡辺健哉、池田智文、林淳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 370
3. 書名 村上専精と日本近代仏教	

1. 著者名 平田茂樹、久保田和男、苗潤博、山根直生、伊藤一馬、塩卓悟、藤本猛、劉江、郭焯、吉野正史、小林晃、小林隆道、梅村尚樹、邱軼皓、渡辺健哉、洪麗珠、于磊、邱靖嘉、李春圓、馬曉林	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上海人民出版社	5. 総ページ数 456
3. 書名 史料與場域：遼宋金元史の文獻拓展與空間體驗	

1. 著者名 鶴間和幸（編）、土屋紀義、竹内康浩、高木智見、藤田勝久、村松弘一、濱川栄、佐々木満美、小嶋茂稔、渡邊義浩、津田資久、金子修一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 336
3. 書名 侠の歴史 東洋編上	

1. 著者名 漢字文献情報処理研究会、千田大介、小島浩之、上地宏一、佐藤仁史、二階堂善弘、師茂樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 好分出版	5. 総ページ数 572
3. 書名 デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル	

1. 著者名 宋代史研究会（梅村尚樹、藤本猛、小林晃、小林隆道）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 462
3. 書名 宋代史研究会報告集（11）宋代史料への回帰と展開	

1. 著者名 渡辺健哉、古松崇志、藤原崇人、武田和哉、高井康典行、蓑島栄紀、井黒忍、吉野正史、毛利英介、豊島悠果、飯山知保、高橋幸吉、阿南・ヴァージニア・史代、松下道信、吉池孝一、更科慎一、趙永軍、白杵勲、中澤寛将、高橋学而、中澤寛将、町田吉隆、中村和之、杉山清彦、承志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 335
3. 書名 アジア遊学：金・女真の歴史とユーラシア東方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	梅村 尚樹 (UMEMURA Naoki) (40847084)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	高橋 亨 (TAKAHASHI Tooru) (20712219)	東北大学・文学研究科・学術研究員 (11301)	
研究分担者	藤本 猛 (HUJIMOTO Takeshi) (50757408)	京都女子大学・文学部・准教授 (34305)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	津田 資久 (TSUDA Tomohisa) (60407195)	国士舘大学・文学部・教授 (32616)	
研究分担者	渡辺 健哉 (WATANABE Kenya) (60419984)	大阪公立大学・大学院文学研究科・教授 (24405)	
研究分担者	小島 浩之 (KOJIMA Hiroyuki) (70334224)	東京大学・大学院経済学研究科（経済学部）・講師 (12601)	
研究分担者	江川 式部 (EGAWA Shikibu) (70468825)	國學院大学・文学部・准教授 (32614)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	熊本 崇 (KUMAMOTO Takashi)		
研究協力者	榎並 岳史 (ENAMI Takeshi)		
研究協力者	村田 岳 (MURATA Gaku)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ペンシルベニア大学			
韓国	東北亜歴史財団			